し勇者の伝説シリーズ/ガーランドのモンスター図鑑「女王蟻」～勇者の見る夢２・闇の王より

田中亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪われし勇者の伝説シリーズ／ガーランドのモンスター図鑑「女王蟻」～勇者の見る夢２・闇の王より～

【Ｎコード】
Ｎ４００７Ｊ

【作者名】
田中亮

【あらすじ】
現代に良く似たファンタジーの世界。そこでは、世界を呪って死んでいった人間は、モンスターとなる。実際の現代社会で起こったノンフィクション事件をモチーフに、モンスターとなった犯人、また被害者と、彼らを倒す使命を持つモンスター処刑人である勇者の、壮絶な戦いの記録。／第二段である今回は、１９８９年末から翌年始にかけて起きた代表的な少年犯罪である、女子高生コンクリート詰め殺人事件をモチーフに、残忍な犯行に及んだ非行少年達の心理

と、それを生み出した社会の病理、また被害者少女の地獄の苦しみと悲しみを、モンスターに例え、勇者に、その全てを叩っ切らせます。その行為が、いつか全ての悪夢を終わらせると信じて。

目次／ご挨拶／前書き

◆目次

ご挨拶
前書き
序章
第一章　状況説明
第二章　刑事のレポート
第三章　皇帝の退屈ばらし
第四章　働き蟻
第五章　ダーティ・ワーク
第六章　死にたい
終章　女王蟻
参考文献・参考資料
連絡先

◆ご挨拶

今回は戦後の少年犯罪史上、最も悪質として広く知られている『女子高生コンクリート詰め殺人事件』をモチーフにして、いつものメンバーでモンスター図鑑を書いてみました。
もう二十代も後一ヶ月で終わるんですが、色々思っていたのと違う、絶望的で地獄の現実が、たまに目の前に現われて、狼狽します。
この事件は、その悲しい現実の象徴のような気がして、向き合いたかったんです。
この世界の一番汚い部分と、暴力と。
それはきっと、自分の一番醜い部分だから。
それと向き合って初めて、真なる人のあったかさや優しさや思いや

り、愛が見えてくるかも知れない、そう思って。
今回も例に漏れず、ふらふらと迷いながら、ありのままのいつもの私です。
私の、そのまんまの、作品です。
どうか残虐でとても痛い作品ですが、心の限り、一生懸命書きました。読んで楽しんで頂けたら、幸いです。

えんａｓ田中亮

◆前書き

この作品は実在の少年事件である、女子高生コンクリート詰め殺人事件をモチーフとしておりますが、あくまでフィクションです。被害者のご冥福を心よりお祈り申し上げます。
世界が平和になりますように。

◆この作品を、いつも心ある絵を描いてくれる仲間、ちょくに捧ぐ。

序章

「・・・頑張れ・・・・・・。・・・・頑張れぇ・・・・・・・。」

煙草の燃えカスや、自分自身の血や膿みでどす黒く薄汚れた布団に全裸で包まって、彼女は武田鉄矢の『声援』という歌のフレーズを、口ずさんでいる。

それは昨日の夜、犯人達が彼女に暴行を加えた時に、カセットテープで流していた歌だ。

「頑張れ、頑張れ、頼む・・・頑張ってくれ。」

その十七才の女子高生は１９８９年の十一月の終わりに、レイプ目的で四人の、十六才から十八才までの不良少年達に拉致監禁され、死亡する一月四日までの四十一日間、彼らの仲間の不良少年達などと共にレイプされ、執拗に冷酷かつ残虐極まりない苛烈な暴行と凌辱を加えられ続けた。

「・・・頑張れ・・・頑張れ、・・・・。」

その歌を流したのは、どんな暴行にも必死で耐える彼女に対して、犯人達が彼女にもっと暴行に耐えて自分たちを愉しませてくれよと、弄ぶ意味で流したものである。

彼らはその曲に合わせて、様々な暴行を彼女に行った。始めは、声を立てぬように座布団で顔をふさぎ、不良仲間達数人でレイプ。その行為に飽きると、性器の毛を剃り、尻の穴に火の点いた花火を突っ込み、性器に直径三センチの鉄の棒を出し入れし、ライターを入れ火をつけた。

彼女はその度に気絶し、髪の毛は抜けていった。

「・・・頑張れ・・・頑張れ・・・頼む頑張れ・・・頑張ってくれ・・・。」

車座になった犯人の少年達の真ん中で、オナニーショーをさせ、眉間に短くなったロウソクを立て、火をつける。犯人達は何かつまらないことがあると殴る蹴るの暴行を加え、シンナーでラリった振りをして、彼女をレイプした。ライターのオイルを太腿や膝、すねにたらして火をつけ、熱がって火を消そうとする彼女を、楽しんだ。痛さをこらえて、口が変な風に歪むのを見て、面白がった。

「・・・頑張れ、・・・頑張れ・・・頼む・・・頑張れ、頑張ってくれ・・・。」

小泉今日子の『なんてったってアイドル』の歌に乗せて全裸で踊らせ、歌にあわせてサンドバッグのように彼女を殴った。六キロの鉄アレイを腹に何度も落とし顔や大腿を殴りつけた。水の変わりに自分の尿を与え、ほとんど食事は与えなかった。

その監禁の事実は、百人を超えるその町の不良少年少女達が認識していたにも拘らず、誰一人警察に通報する者はいなかった。レイプに加わった一部の少年達は、何の罪に罰されることもなく、また一軒家の二階で行われた監禁行為に対し、同居しその事実を認識していた不良少年の両親も、不良少年の暴力を恐れ、無視を決め込んだ。警察は犯人の目を盗んで１１０番通報した彼女の電話を、きちんと捜査せず、少年法は彼らに数年の実刑しか与えなかった。
メディアは被害者のみ、実名・写真入りで報じ、まるでミステリードラマのように連日面白がってこの犯罪を取り上げた。
インターネットの２ｃｈではこのニュースに興奮して、オナニーしたというような青少年達の書き込みや、犯人達をうらやむ書き込み

も溢れた。
そして彼女は年の明けた一月四日死に、ドラム缶にコンクリート詰めにされ、東京湾岸の埋め立て地に放置された。その時、膣にはオロナミンCの瓶が二本押し込まれたままで、ガムテープでぐるぐる巻きにされ、体は皮下脂肪が半分に減り、髪の毛はほとんどなかった。

「・・・頑張れ、・・・頑張れ・・・頼む・・・頑張れ、頑張ってくれ・・・・。」

頬は鼻の高さを超えるまで腫れ上がり、目の位置は陥没して分からず、全身にやけどの傷があり化膿し、膿みを流し続けていた。

「・・・頑張れ、・・・頑張れ・・・頼む・・・頑張れ、頑張ってくれ・・・・。」

その歌のフレーズを、彼女は犯人達が出かけている間ずっと自分を勇気付ける為に口ずさんでいた。

「頑張れ・・・頑張れ・・・・・・・。」

暴行の最中、彼女は「殺してくれ、殺してくれ」と犯人に涙ながらに絶叫した。彼らはそれを面白がり、彼女を玩具にして弄んだ。彼女は世界を呪いながら、死んでいった。

その事件のあった、綾瀬の町は、蠢きながらその日々の間も営みを続けていた。歯車が重なり、人が機械のように行動している。彼ら自身の目的だけしか目に入らない、それはまるで、アリ達のようだ。

この世界では、世界を呪いながら死んでいった人間は、モンスター

となって生まれ変わる。その呪いの怨念が強ければ強いほど、強大な力を持った異形のモンスターとなって。

彼女は卒業後の就職も決まりこれから夢に溢れる世界へと飛び立つ直前に、唐突に何の落ち度もなく、地獄へと叩き落されたのである。

波音の聞こえる、コンクリートの詰められたドラム缶の中でコポリと、彼女の死体が小さな音を立てた。

第一章　状況説明

悪夢を見る。モンスター討伐の前には、勇者は決まって、悪夢を見る。ベッドに自分の体を縛り付けて、眠る。もう自分で自分の体を縛るのにも慣れた。目が醒めると、魔法をかけられたクラウンのマリオネットが鎖をはずしてくれる。

「ありがとう、クラウン。」

クラウンは、目の下に涙マークの化粧の無いピエロの事である。ピエロが転んだり、失恋したりと涙で笑いを誘うのに対し、クラウンは卵をぶつけあったりいたずらしたりと、馬鹿な事をして笑いを取るという違いがある。
クラウンはふわふわと浮かびながら、器用に鎖をほどいていく。
と、向こう、この宿の一階へ降りる階段へと続く扉の前に黒い山高帽にコートを背負った白ひげの老人が、一人。彼は不気味に笑って口を開く。

「どんな悪夢を見ていたのかね、アース・ヘイワード。」

彼は杖を突きながら重そうな巨大なスーツケースをひきずり、部屋の中央に置くと、クラウンを抱いて頭を撫でる。クラウンが頭を猫のように老人に擦り付けて手の中に収まり、固まった人形へと姿を戻す。

「いつも同じ夢さ。魔王になって、世界を滅ぼす夢。天高く浮かんで漆黒の鎧を身につけ赤黒く煮えたぎった溶岩の玉を無数に地表に投げ落とす夢。高笑いしながら・・・。」

勇者は目を伏せる。

「そして唐突に、俺は何かの犯罪の場面を見る。人が人としての一線を越えて、罪を犯す光景を。まるで、映画の一シーンみたいに、ガーランドがこうして、仕事を持ってくるときにはいつも、な。」

老人は笑って、懐から一冊の羊皮紙で書かれた茶の本を取り出し、ページを広げ、勇者に手渡す。

「それが次の獲物だ。アース・ヘイワード。」

そして大量の金貨入りの袋を勇者に渡す。

「こっちが、前回のモンスター退治の報酬だ。」

勇者は思い出している。これまでの事を。

俺は呪いにかけられている、魔王によって。もうずっと昔、俺は世界を破壊し、混沌によって支配しようとした魔王を倒した。けれど奴は死の間際、俺に呪いをかけ、俺の過去の記憶のほとんどを奪い、俺自身が魔王となる悪夢を毎晩見せた。

「女王蟻・・・。全てのアリと、それを支配するもの、・・・か。」

その一冊の本は元々魔王の執事であったこの老人であり人形使いが私にくれた物だ。命を助ける代わりに、俺に呪いを解く方法を教えてくれた。

「この図鑑に書かれている魔王の直属の部下１０８匹全てを倒すことで、お前の呪いは解けるだろうさ・・・。」

だから俺は魔王を倒して尚、旅をしている。獲物の血を吸って、桜の赤々と咲く廃村を。猛り狂った津波に襲われ、人が塩となってしまった白壁の町を。秋でさえ色付くことの無い深き緑の迷いの森を。醜きヘドロも、どす黒い赤い血も、人を惑わす金色の石も、憎しみの炎によりその冷たさを増す見晴るかす、雪の平原を。私は旅して、戦場を、飢餓の町を、歪んだ都市を、古い因習にすがる山里の村を、私は旅をして、人を呪いながら死んだ人間が産まれかわった化け物、モンスターを倒し続けている。

各地のモンスター討伐の依頼は、冒険者ギルドという、各地の戦士や魔法使いの所属する組合へ提出され、その中からガーランドが本に書かれたモンスターの物を見つけて、俺に届けてくれる。
ガーランドはスーツケースの鍵を開けると、開く。そこには大量の、様々な種類の武器が入れられている。クラウンが目を醒まして騒ぎ出す。

「わあ、凄いね、これだけ種類があれば、アリを色んな方法でなぶり殺して遊べるね。ワクワクするね。」

アースは銃をいくつか腰に差し、いつも肌身離さず身につけている白銀の剣の束に、そっと手で触れた。それは、一番頼りになるのはお前だけだという愛する剣への釈明のようでもあった。
クラウンは曲芸師のように、殺虫剤や、手投げ爆弾、ショットガン等を次々と抱えたサンタークロースのような小袋につめていく。しかしそれはドラエもんのポケットのように、大きく膨らむことは無い。内部は無限大に広がっていて、彼はいつでも必要な時に、勇者の求めに応じてそれらを出す事が出来る。
アースが口を開く。

「小さい頃に、野原のアリを、色んな方法でいじめて、遊んだよな

あ。今回のモンスター討伐は、アリの皆殺し祭りだ。久々にやりたい放題出来るぞ、クラウン。」
「うんっ！」
クラウンが笑って、ふわふわと勇者の肩に乗る。
ガーランドが手で印を切り、茶色の扉を魔法で作り出す。そして逆の窓の方を、杖で差し示す。
「この宿を出て、太陽の方角へ道なりに進めば、女王に支配された蟻の巣、綾瀬の町がある。おいで。」
ガーランドはクラウンを呼び寄せて、体中の関節のチェックと、そこから自分の指につながるとても細く、薄い魔法の蜘蛛の糸を確かめ、人形のおでこのキスをする。
「私はクラウンと共にある。何かあればすぐに駆け付けよう。お前がモンスターを無事に倒せることを祈っているよ。」
そうして彼は茶色の魔法の扉に手をかける。彼には次のモンスターを探すという彼の役割があるのだ。
何度も、何度もそれは繰り返される光景であった。ガーランドのモンスター図鑑に書かれた全てのモンスターを倒すまで二人と一匹の旅が終わる事は無い。
話をしている間に、夜明けである。彼は鉄の鎧に、革の茶のマントを身につけ、立ち上がる。
彼はそうしてほんの少しの間、窓越しの光を見つめるのだった。
窓辺に宿の主人が置いた、小さな観葉植物が、光を透かして優しい緑の影を、作っている・・・。

第二章　刑事のレポート

日が高く昇っている。どこまでも続く一本道を歩いていると、その綾瀬の町は姿を現す。勇者は見る。冷たい澄んだ空気に、灰色のくすんだ都市を。

この綾瀬の町は、近隣に大都市を抱えたベッドタウンとして生まれた。高度経済成長で急増した人口は地方からの貧困層の都市への流入を招き、大都市の近郊に野山を切り開いた、台所と居間と寝室だけのビジネスホテルのような集合住宅がいくつも築かれた。植生していた木々達は刈られ、狭い道と、巨大な学校、ショッピングモール、ファミレス、ファーストフード、色の無い、新しい、当り前の人工物が町に溢れた。唯一、それらの支配者である人であり、大都市の労働者だけが、そこで文字通り蠢いた。

人々がひしめき、蠢く度、町はきしみながら歯車を回す。それは巨大な生命体のように思える。虚ろな、徘徊する亡者のような・・・。

勇者達は、一直線に大通りを進んで、町の中央にある警察署へと向かった。

「誰もいないねぇ。虫一つ、鳥一ついないねぇ・・・。ごみ一つ落ちてない。」

「蟻は何でも食うからな。」

勇者は戦いの楽しげな予感に胸震わせて、袋からショットガンを取り出し、弾を込め、カチャリと、スライドを引いておく。

「暴力をしない、させない、ゆるさない。」

中学生の書いた、暴力を無くそうという標語が、黄色い幕に書かれ

て警察署のビルの屋上から垂れ下がっている。が、それは風で一度ねじれ、途中からは裏側から何とかして読み取らねばならない。パトカーが数台止められているが、屋内の電気は点いていない。勇者は雨避けのある玄関を行き、四角いスリガラスの付いた扉を蹴り開く。

中に、人・・・らしきものは、いた。目を赤く血走らせて、獣のように半裸で、床を這いずり回る者、壁を器用に駆け回る者、机に座って、顎を上下に何度も動かしている者もいた。

「やばいねぇ・・・。」

クラウンが言うが早いか、彼らはこちらを見、奇声を上げるとその姿を巨大な蟻の姿へと変身させていく。アゴが大きく裂け、目の上を突き破って二つの触覚が姿を現す。両脇の下からもう二つの腕が生え、体中の肉が体内の骨の中へめり込んで行き、腹がまるで風船のように膨らんで、巨大な尻が出来上がる。外側へと出た骨はシールドのように体を覆うように広がり、その色を変え、黒光りする甲冑となる！

彼らは勇者を喰らわんと、飛びかかる。

”ズバーン！ズバーン！ズバーン！”

勇者がそれらの頭部をショットガンで撃ち抜いていく。脳ずいが勢い良く飛び散り警察署の壁にぶつかり垂れ落ちる。六体を倒すと、彼は一人一人の名札を確認していく。しかし頭を振る。何匹かのアリを倒しながら、彼は二階の署長室へと辿り着く。扉を開けて、中へ入る。壊れたブラインドが揺れているが、誰もいない。

「危ない！」

クラウンが叫ぶが、勇者は揺れているブラインドを見て察していた。上を見ることもなく、ショットガンを頭上にぶっぱなし、後ろへひらりと飛びのく。

どさり、と落ちてくる死体。彼は名札を見る。そこには、ルイス・チャップマンと書かれている。

（こいつが依頼主か・・・。）

彼は机上に置かれたファイルを見つける。

（蟻のモンスターに関する調査報告書。）

勇者は署長椅子に座り、それをペラペラとめくり始める。

それは、ルイス・チャップマンと警察が生前、その命を懸けて調査した、蟻のモンスターに関する調査の全てだった。そこには、蟻のモンスターの生態に関する基本から始まり、彼らのリーダーである四人の蟻について詳しく書かれていた。そして今回のモンスター退治の根幹を為す、彼らに共通するある一つの少年犯罪事件についても。

（女子高生コンクリート詰め殺人事件との関連性。）

アースは懐から煙草を取り出し、クラウンがライターで火をつける。深く吸い込むと、クラウンにその煙を浴びせかける。クラウンがそれを吸い込んでイルカの芸のように輪っかを作って遊ぶ。アースはその事件の顛末を読み耽っている。

「なあ、クラウン。」

「ん？」

ブラインド越しの光が、二人を照らす。

「酒持ってる？」
「うん、あるよ。」
「ウォッカある？」
「ほい。」

クラウンが袋から、ウォッカを取り出し、それをそのままあおるアース・ヘイワード。口元を袖で拭う。

「よっ。お見事な飲みっぷり！」
「ふふふ・・・。」

勇者が立ち上がる。

「よっしゃー！ガソリン入りました。全員めったためたのぎったぎたに、蟻の巣皆殺しじゃーっ！」

勇者は剣を抜くと、天高く突き上げる。クラウンがそれを見て、ケラケラと笑っている。

（胸が痛い。胸が・・・胸の痛みを、酒で押し流して、全てを壊してしまおう。）

モンスターが元は人間だと、少しでも考えれば殺すことが辛くなる。彼らの悲しい生き様を知れば、いつもなおさら。それでも倒すのは、彼らの呪いを解く為だ。モンスターとなった彼らを、悪夢から解き放つ為だ。

第三章　皇帝の退屈ばらし

革のマントを翻して、風の無い一本道を、アースは行く。肩にクラウンを乗せて、月を背に。
遠くから聞こえてくるのは、微かな暴走族のクラクションの音。町を徘徊しているのだ。
ルイス・チャップマンのレポートによれば蟻の一味のリーダーの一人で、女子高生コンクリート詰め殺人事件の副主犯格の男が、暴走族を率いて改造バイクに乗り、町の中央を走る高速道を徘徊しているとのことだった。
勇者はクラウンの持っている袋から、黄と黒の縞の工事用ロープを取り出し、道の端から、道路をまたぐように、腰ぐらいの高さでそれを張って行く。

「ゴキブリホイホイならぬ、アリホイホイだ〜。」

と、訳のわからぬテンションでロープを張り終えると、勇者はそのピンと張ったロープの上に、拳法の達人張りに爪先を立てて乗り、腕を組む。クラウンが肩でそれを真似している。道路の先を見つめる勇者。

蟻の暴走族がやってくる。といってもまだ変身しているのは半分程で、リーダー格の男はしんがりを務めている。様々な色のライトでデコレーションされ、カラースプレーで女性アイドル歌手・小泉今日子の描かれた黒のバイクに、天上天下唯我独尊と刺繍のされた特攻服を着て、木刀を携えている。
勇者はおもむろに、近くで盗んだバイクで走り出し、音と光のイルミネーションの彼らの間を、縫うように走り挑発する。騒然とする

暴走族。リーダーの所まで行きファイルを取り出して、顔を確認すると、頷いて列の先頭へ走り出し、バイクの上へ曲芸の様に立ち上がり、ズボンとパンツを下ろし、生尻でお尻ペンペンをする。激昂する暴走族達。彼らはみんな軍隊蟻に変身し、恐ろしいスピードで勇者のバイクを追いかけてくる。もうすぐロープを張ったポイントだ。勇者はバイクからジャンプして飛び上がると、空中を飛ぶクラウンの足を取り、パタパタと遠ざかる。

「お、重い・・・。」

クラウンが主張しつつ、道路の端へ勇者を降ろす。勇者はガードレールの上に、また拳法家の様に立ち、暴走族集団を見守る。

”ズガーン！”

ロープに。凄い速度で突っ込んで行く暴走アリ達。彼らの三つの胴体が千切れ赤と透明の体液の混じった血がシャワーの様に道路に散乱する。そこへ次々と突っ込んで行く暴走族アリ達。

「あーっはっはっはっ！」

腹を抱えて笑い転げるアースとクラウン。アースは剣を抜くと、腰に下げたウォッカの酒瓶を飲み、うおーっと愉しげな雄叫びをあげて、彼らへと向かっていく。

アースは踊るように、歌うように、蟻を殺していく。事故で倒れているアリのヘルメットを左手で持ち上げ首を落とし、左から襲ってくるアリをバイクのはずれたバックミラーで殴り殺し、右のアリの胴を切りつける。

幸い事故に巻き込まれずに済んだアリ達が尾を高く持ち上げてアー

スへと迫ってくる。

レポートによれば、彼ら暴走族のアリ達は、アリの集団において戦う役目を持ち、尾には毒針があり、それは人の遺伝子を変えアリにしてしまう蟻酸という毒を含んでいるのだという。

「キシャーッ！」

彼らが尾から黄色の分泌液を、交尾を焦らされた犬のペニスから出る、先走り汁のように垂らしながら襲い掛かってくる。右と左から。勇者は、閃いた！とばかりに、グーにした右手とパーの左手を叩き合わせ、彼らの頭を掴み頭突きさせ、尾を両手で掴む。そして、互いの彼らのアゴの中へそれを差し込み、二人の下腹に蹴りを入れる！発射される精液ならぬ蟻酸。彼らの顔はもろくも蟻の酸によって溶けていく。

「暴力はしないさせない許さな～い。」

クラウンが宙に浮かびお尻を振りながら勝手な節をつけて歌っている。彼らはこの毒液で毎夜住民達を襲い、この町全体を蟻の巣へと変えていった。
言わば蟻の軍隊における侵略部隊。彼らだけが酸を使う能力を持っている。

パイプで襲い掛かってくる彼らのリーダー格の男。勇者は腹に蹴りを入れると、それを奪い、ぼこぼこにし、目のついた触角をもぎとり、胴の中央にその鉄パイプを恐ろしい力で突き立て、コンクリートまで貫く。

「げぼぅ！」

蟻が昆虫と人間の色の混じった薄赤い血を吐くと、クラウン。

「今回は、強いねぇ・・・。いつもやられたい放題なのに。」

勇者は血に塗れた顔で高笑いすると、そのリーダー格の男のバイクのガソリンのふたを開け、それをバイクごと持ち上げて、彼にかける。そして、蜘蛛の絵の描かれた愛用のジッポーを取り出し、セブンスターの煙草に火をつけると一服して、彼の頭を固いブーツの靴で踏みつけて、言う。

「素直に話せば許してやる。何で、あの子を殺した。」

もう力を失い、人間の姿へと戻った暴走アリのリーダーの男が、勇者を怯えた目で見て言う。

「つまらなかった。毎日がとてもつまらなかったから、あいつをいじめていると、えらくなれた気がした。」

朦朧とした意識の中で、勇者はモンスターの魂へとつながる。死を懸けた戦いはいつもそうだ。モンスターの痛みを、俺は全部背負う。それが、俺の、仕事。

女子高生コンクリート事件の副主犯格であり、主犯格の次に暴行を主導した彼は幼い頃から何でも暴力で解決する癖があった。彼の両親は、仲が悪く、彼は愛されて育たず、頭も悪く、中学の時のスキーでの事故でスポーツも出来ずに、非行へと走っていった。

だが、親に愛されず、何の能力も持たない人間が、必ず非行に走るわけではない。人による。彼の魂は言う。

「何の夢も無くて、生活に目的が無くて、学校を辞めるとね、する

こともなくなって・・・。誰かに誉められたい、目立ちたい、見せ付けたい。そうだ喧嘩だ。痛みだ、苦痛だ。その中でなら、つながっていられる。なんとなくみんなでつるんで、いじめれば、いばれる。何も考えたくない・・・死ねぼけがぁ、怖い、怖いよ・・・どうしてあんなことしたんだろう。一人だ。寂しい・・・誰もいない・・・この世は虚ろ・・・無。・・・無！」

最後の力を振り絞って、その副主犯格だった男は、勇者に、尾の毒針を突き立てようとし、大あごを大きく開いて、咬み付こうとする。だが、全く、効かない。

「カスが。うぜーんだよ。」

勇者は副主犯格の男の頭を林檎のように踏み付け砕き、煙草をもう一息吸うとそれを地面に落として、彼に火をつけた。

「ガキは家でオナニーでもしてろ。人に迷惑をかけんな、ほんと。くそガキ共め。」

第四章　働き蟻

「よし、後三匹ー！」

大物は後三匹だった。アースはくわえ煙草でレポートをながめ、次の犯人の目星をつける。

「次の狙いは、働きアリだ。」

アースは煙草を投げると足で踏み付け、拾い、銀の携帯灰皿に入れる。

暴走アリに手間取っていたら、時間は朝である。日が昇り、彼らを照らす。家々から、虚ろな眼をした住人達が皆一様にスーツとかばん姿で出かけていく。男女問わずである。彼らは一言も話さず、人間の姿で、電車に乗り、隣にある大都市へと向かう。まるで無言の初詣の群集のようだ。駅でアース達はそれを見つめ、クラウンが口を開く。

「止めないで良いの？他の町で、アリを増やさないの？」

「大丈夫。働きアリにその能力は無い。それに、アリは基本的にアリではない他者がいなければ成り立たないんだ。まぁ、口で言っても分かり辛い。どうせ奴らが戻ってくる夕方まで暇なんだ。寝るぞ！」

「え？」

「徹夜で殺したから、眠い！」

「へーい。」

彼らは駅前の無人のファストフード店に上がり込み。意味も無く喫煙席を選び、持って来た食料で簡単な腹ごしらえをすると、派手な

原色のソファーに横になって眠った。
夕刻。町に、クラシック音楽と共に、失踪者を告げるアナウンスが流される。それは最後に放送されたもので、毎日、毎日、同じアナウンスである。

「本日二時頃、認知症を持つ七十七歳のおばあちゃんが、白いジャンパーを着て、茶色の花柄のスカートを履いて家を出たまま、行方がわからなくなっています。何か心当たりのある方は、すぐに綾瀬警察署まで連絡をお願いします・・・。」

クラウンがその声で目を醒まして、一人ごちる。

「むしろ、今はみんなモンスターになってる。みたいなね。」

勇者がうなり声をあげてじたばたし、悪夢を見ている。

「クラウンドリルキーック！」

空中でドリルのように回転しながら、勇者アースを起こそうとするクラウン。と、ムクリと起き、その人形の胴をむぎゅ、と両手で掴む。

「おはよう。」
「お・・・おはようございます。」

○

駅前の階段に二人、体操座りで座り込み、両肘を突いてあごを両手で支え頭を乗せ、アンニュイに電車の到着を待つ二人。

「最近さぁ。」
「はぁ。」
勇者が口を開く。
「太ったよ、ちょっと。甘い物食ってばっかりいたから。」
肉をつまむ勇者たん。クラウンが答える。
「お前もアリのモンスターだな、デブ。」
「なにをおおこのチビ、物食えねーくせにいい。」
「デブデブデブデブデブーッ！」
二人で頬の掴み合いをしていると、ピンポンパンポンと電車の到着を告げるアナウンスと共に、一人の少年が完全に前を見ずに、黒くて大きな改造携帯ゲーム機でゲームをしながら、二人の正面へやってくる。
「あ・・・。」
勇者は近づき、それが探している四人の犯人のうちの一人だと知る。彼はオタクで、元々は女子高生の監禁現場を溜まり場としてゲームをしていただけの人間であった。
他の三人の犯人のように元から非行に走っていたというわけではなく、いつも、ゲームばかりし、他の三人にけしかけられて、何かの線が切れ、女子高生への残虐行為を楽しむようになったのだと、レポートには書かれている。
「あ・・・あの、こんにち・・・。」
「――。」

完全に無視である。と、電車がホームに着き、腹をめいっぱいに膨らませた、大量の綾瀬の住人達が降りてくる。クラウンが言う。

「なんだ、これ！みんなデブになってる！尻が超でかくて、黄金色に輝いている。」

勇者が答える。

「蜜を集めて来たのさ。」

と、犯人の少年がゲームの音量を上げる。響く電子音と共に、彼の後ろをぞろぞろと付き従う働きアリ達。

勇者はクラウンに言う。

「この尻の中には、甘い蜜がいっぱい詰まってる。こいつらは汗水垂らして働いた金で、スーパーとかで砂糖やハチミツを大量に買い込んで、全部飲み込むんだ。」

勇者は思い描く。くたびれたサラリーマン蟻の働く姿を。上司に頭を下げて、その会社のひり出す甘い汁のような金を手にして、スーパーで砂糖や必要な食糧を買い、体に詰め込み家に帰ってくる。それは、アブラ虫が出す甘い汁にたかる蟻のよう。

金を必死で集める様は、小判のような形をした害虫、カイガラ虫の出す甘い汁にたかる、蟻。

美しいシジミ蝶の幼虫の出す甘い汁にたかるアリは、毎夜若い男女の体に吸い付いて、春を喰らうオヤジやババア、盛りあうしか能の無い猿のようなクソがき達。

彼らはみんな、体の中に、蟻が必要な栄養の全てを蓄えて、戻ってくる。他の仲間や、女王を養う為に。

「へぇ〜。」

クラウンは、遊ぶように、いくつかの腹を、風船を割るように突ついて破裂させている。働き蟻達は今は先頭を行く少年に従っている為、攻撃しては来ない。破裂した蜜を涙目で舐めて集める。
町の大通りを進む少年。勇者は彼の目の前に手を翳すが、反応してくれない。面白いので、ゲームの画面を手で隠してみるが、無反応である。見れば、目の網膜に、ゲーム画面が映り込んでしまっているのだ。そこでは有名なゲームであるドラゴンクエスト?が、延々と繰り返されている。
その道の先には、市役所がある。クラウンと勇者は先にそこへ向かい、屋上の貯水タンクの上に足を投げ出して座って、彼らを見つめている。

「何が始まるのかねぇ。」

クラウンが言うと、ハーメルンの笛吹きのような、無言の初詣集団は、歩いて、市役所の前の広場に巨大な穴を手で掘り始める。出来上がったそこに、彼らは体内の蜜を吐き出していく。

”ゲーッ！ゲーッ！”

引率の少年は、それを管理しているようだ。
勇者はクラウンに目配せし、貯水タンクから、飛び降りると目を凝らして人を探した。

「未成年の子供の責任はーっ！」

と、叫ぶ勇者。答えるクラウン。

「親の責任ーっ！」

事件のレポートのファイルをひらひらさせながら、犯人の両親達を、次々と見つけていく勇者。主犯格の少年の両親に対して、判決文を言い渡す。まずは夫。

「お前は家庭に協力せず、息子が家出した時も家で寝転がり高笑いをしてテレビを見ていた。よって死刑！」

彼はその虚ろなサラリーマンの背中を蹴り、蜜の海へ背中から突き落とす。次は妻。

「お前は夫が浮気していても、三つ指突いて待ち従うばかりで夫と向き合おうとせず、仕事に逃げ打ち込み、子供に満足に構わなかった。よって死刑！」

同じように彼女を突き落とす。溺れてぎぇーぎぇーと叫ぶ両親達。次々と、四人の少年の両親達に判決が下される。

「お前は男として自分の人生を大事にしたいからと子供を置いて浮気、離婚した。周囲に責任を持たなかった。よって死刑！」

「お前は旦那を見返そうと水商売で常にＴＯＰを守り続ける為に、負けず嫌いから、子を甘えさせなかった。よって死刑！」

「お前ら夫婦は病院勤務で忙しさにかまけ体罰教育を行い、自宅が犯行現場で四十一日も監禁されていたのに犯行に気づけず通報すらしなかった、よって死刑！」

次々と蜜の海へ突き落とされる中、オタクの少年の母親が最後に残される。

「お前は、幼い頃から貧乏に暮らし苦労した自身の経験から、母子家庭であり父のいない自分の子を、決して甘やかさず強く育てようとした。息子が万引き犯に間違われた時も、店にひたすら頭を下げ、天然パーマの息子が頭をパーマにしたと学校で間違われ体罰を受けた時も、息子を擁護することなく教師に平謝りし、大切な遊具を盗まれ泣いていた時も、犯人がわかっていても取り返すことなく、子に強く生きなさいと叱った。抱きしめず頭を撫でることさえせずに。それが世間を行き抜く為の、お前の処世術だった。」

勇者はちらりと、オタクの少年を見る。

「よって死刑！」

母親が突き落とされる時も、少年はピクリとも動かず、ゲームを続けている。

「よし、クラウン。マシンガンを四丁出して。」

その中の二つをクラウンに渡すと、勇者は言う。

「よっしゃー！殺虫剤散布しちゃる！！」

キシャー！と、二人によって降り注がれる銃弾の雨は、さながら殺虫剤が撒かれるかの様。クラウンもケタケタ笑いながら次々と働き蟻を殺していく。

勇者の心に蟻達の声が響く。急速な都市の発展の中で、お金を求めてこの町に住みついた。子供を抱えて、小さな町工場や低賃金の職場で働いた。余裕を無くして、パートナーを愛せなくなった。食べ

ていく為に、子供にかまっていられなかった。

「死ね！死ね、死ね、死ねえー！」

勇者は手が震えた。本当の悪は、彼らではない。だが、モンスターとなってしまった彼らを悪夢から解き放つことが出来るのは自分だけだった。だから

「殺す！殺す！殺ーすっ！モンスターは全部皆殺しだあああ！」

セーラー服と機関銃という映画の薬師丸ひろ子のようにマシンガンをぶっとばして、働き蟻を殲滅すると、勇者はふらふらした頭のまま、リーダーのオタクの少年に詰め寄った。髪の毛を掴み、自分に顔を向けさせる。

「何で、殺したあああ！」

叫び上げるが、男は何も答えない。」

「・・・・・・。」

彼に、心は無かった。何も期待出来ない、下らない世界で、ゲームだけが全てだった。

「なあ、お前、いじめられてたんだってなあ。でも親は守ってくれなくて、むしろ強くなれって、怒られたんだってなあ。」

だが、彼の目は、うつろなままである。

「なんとなくあの場所にいて、最初は無理矢理参加させられて、で

も最後は他の三人と一緒になって、暴行を楽しんだんだよなぁ。」

彼の目は虚ろなままである。

「俺はお前に伝えてやりたかったよ。お前がモンスターになる前に、この世界の美しさを。どんなに苦しく辛くとも、その闇の中で見つけた、小さな光の美しく、綺麗で、暖かい事を。それを知らずに死んでいく。それがお前の、彼女への償いだ。くそガキが。くそガキがあああ！！」

勇者の手は震えて泣きながら、彼の首を絞める。彼はその苦痛の中で、命を失った。

勇者は、どさりとその死体を蜜穴に投げ落とすと、ウォッカの酒瓶をあおる。

「よっしゃーっ！後二体！」

第五章　ダーティ・ワーク

今度はファミレスで眠り、ぼけーっと市役所の蜜穴の前に座っている二人。うんこ座りをして。
と、そこへトラックの荷台に紙袋を積んで、白衣とマスクを着たガーランドがやってくる。

「よう！」

二人はボーッと蜜穴を見ていた瞳をガーランドの方へ一斉に向けて、ニコーッと笑う。

「毒物カレー事件イエーイ！」

二人は少しおかしなテンションで、その白い袋の中身を蜜の穴の中へぶち負けていく。ガーランドが口を開く。

「しかし、お前も恐ろしい事を考えつくな。蜜にヒ素を混ぜてアリの巣コロリを作ろうだなどと、よほどの黒い人間でなければ考えつかぬ。」

クラウンとアースが長い棒切れで、蜜穴を掻き混ぜる。じっと、黄金色の蜜を見つめながら。

「2チャンネルって、知ってるかい。ガーランド。」

ん？という顔をして、アースを見るガーランド。

「インターネットの中の掲示板ってやつで、色んな事についてみん

なで語り合うんだ。その中にね、この女子高生コンクリート詰め殺人事件の事も面白おかしく語られていて、中には犯人達の残虐行為のアイデアの豊富さについて、褒めている奴もいてね。負けたくないって、思ってさ。」

アースは、蜜穴に唾を吐く。クラウンが勇者の肩に乗る。
少しの時間があって、そこにアリの運転するバキュームカーとトラックがやってくる。彼らはその毒入り蜜をバキュームカーでドラム缶に詰めて、運び出していく。
命令に従って働いている間は、決して危害を加えてこない彼らアリの働く様を横目に、アースはガーランドに耳打ちする。

「かしこまりました。」

と、ガーランドは言って、立ち去り、アースとクラウンは、給食センターと書かれたトラックの荷台に横並びに座り揺られて、それが目的地に着くのを待っている。

○

そうして車は学校へと辿り着いた。綾瀬で一番大きく、文部省によって、生徒指導研究推進校にも指定された管理の行き届いた中学校。二人は校門の所で車から飛び降りると、ピストルを取り出し、マトリックスのように正門から乗り込んでいく。二人は守衛を倒し、学校を探索しながら歩く。何人もの子供達がアリの先生の授業を受けている。アース達は女教師の授業に聞き耳を立てる。

「お前達は、女王様に愛される子供である。だからお前達は、女王様に愛されるにふさわしい蟻とならねばならぬ。お前達は人間社会で、必要とされる知恵を身につけ、体を鍛え、屈強な兵士となるべ

く努力し、何よりこの学校で校則を守り、社会において秩序を守る事を学べ！」

と、咳込むアリの少年の頭にムチを打ち、それをひねり千切る。どうっ！と胴体が横倒しになり、首の根元から薄赤い血が教室の床へ大量に流れ出るが、誰も一糸乱れることはない。

「お前達は一列になって、例え夏の炎天下、どんなに熱いアスファルトの上であっても、一糸乱れることなく歩み続ける蟻であれ。そうすれば人間のように、何かを得る事が出来ずまた何かを失い、悲しみや苦しみに嘆くこともない。心を捨て、命令のままに生きる、良きアリとなるのだ。お前達個人に特別な価値など、無い。お前達の誰一人いなくなろうと、同じように世界は廻る。そして何も、変わらない！」

女教師蟻が顎を大きく開いて宣言する。

「社会の下僕たれ！飛び出る物は引っこ抜く！落ちこぼれは切り捨てる！それが女王様のご命令だ！」

校庭で行われている体育の授業でも、跳び箱を飛べぬ子は鞭で殺され、監視をしている腕章を付けた風紀委員アリ達が後処理をし、裏にある大きな砂場へ彼らを捨てていく。

「お前達の替わりはいくらでもいるぞー！」

彼らはそれをゴミ捨て場と呼んでいて、そこに死体を投げ込むと、砂は嵐のように渦を巻き死体を呑み込んだ。クラウンがその砂場の砂を触って遊んでいる。

「これ、町のあちこちにあったもんねえ。規律を乱すアリは、これに投げ込まれるんだね。」

アースはそれを見つめ、また目を授業に戻した。

○

学校に併設されている図書館で本を読んでいるアース・ヘイワード。

「何を読んでいるの？」

「蟻の図鑑さ。何か面白い事、書いてないかなあって。」

彼はゆっくりとそれを読み進めて、いくつかを羊皮紙にメモる。

「ねえ、クラウン。これ、やってみない？面白そう。」

彼はクラウンに図鑑の一部を指し示す。うなずき、良いね、とケタケタ笑うクラウン。

「多分、似てるよねえ。僕、体育倉庫から、生石灰、取って来る。」

うん、と勇者はうなずくと、後の準備は任せろと言って、一人で校長室へと向かった。

○

そこには、三人目の犯人がいて、校長室の豪華な革張りの椅子に足を組んで座って、勇者を見つめている。

「お前が、サブローだな。女子高生を殺した、犯人のうちの一人。」

ごく普通の、これといって何の特徴もない、髪を真ん中分けにした少年が勇者に答える。

「ああ、そうだよ。」

「何故殺した。」

勇者は残りの犯人にしたのと同じ質問をする。

「さあ。あいつらに言われたから。リーダー達に。俺は無理矢理やらされただけだ。」

勇者は歩み寄り、サブローと呼ばれたその男のアゴを手に取り、上に押し上げ、目を合わせる。

「お前は、自分より強い人間に頼まれればなんでもやるんだな。彼女を殴り、犯し、監禁し、なぶりいたぶり壊し、お前には男の誇りってもんが何も無えな。」

アースは男の額に人差し指をぴたりとつける。

「私はお前より強い。動けるものなら、動いてみろ。」

サブローは人からアリの姿となり、椅子から立ち上がろうとするが、立ち上がれない。やがて、力を落とす。

「これでお前は私の言うことを、何でも聞くんだな？」

サブローはうなずく。

「では、校庭に全てのアリと教師を集めろ。」
アースは足で、校長室の机に備え付けられたマイクを蹴やる赤いボタンを押して、校内放送を行うサブロー校長。
「次は屋上だ。」
○
屋上で、アースとサブローが向き合っている。
勇者が笑っている。
「何でも言う事を聞くなら、死ね。」
アースは絵的にそれっぽいかなあと、ガムを噛みながら、片足に体重を乗せて、ポケットに両手を突っ込み言う。
サブローが、無理です、と答える。
「ほう。」
アースはガムを吐き捨て、煙草を吸い、サブローの喉に火の点いた煙草を押し付け、煙を吐きかける。
「お前の裁判記録を見せて貰った。小さい頃から、親から体罰で厳しくしつけられ、学校でも規律を正す名目で行われていた教師による体罰で、落ちこぼれと見做され、非行に走ったと描かれている。お前は何でもかんでも人のせいだな。
自分の決断、自分の頭を使うことはおいてけぼり。だから、俺がお前の死を、決めてやろうってんだ。言われれば、何でもするんだろう？

ここから飛び降りて、みんなに、死について、教えてやれ。校長センセ。」

目が怯えている。そして、反発を示している。サブローは飛び掛ってくるので、アースは蹴り上げ、屋上からグラウンドへ突き落とす。三つの体が破裂して、体液が飛び散る。

勇者は同じ場所からふわりと飛び降り、鉄製の朝礼台に立って、全アリの教師と生徒にお腹の前に手を差し入れ腰を折る貴族の挨拶をする。

「私が、前校長の急逝によりこの学校の新しい校長となりましたアース・ヘイワードです。生徒は、着座！教師達は私の前へ、お尻を突き出して整列！」

アースは懐から二十メートルはあろうかという長さの鞭を取り出し、騒ぐ群集の中央に、モーセの海渡りのように打ち込む！静まり返り、教師が数十人、アースの前にお尻を突き出す。

「教師達よ。お前達は人間だった頃、貧乏で親によるしつけのままならない子供達を代わりに預かり、学校内、学校外にわたり厳しく校則を守らせ、管理したな。

子供達はすぐに暴力に訴え、暴れ、普通の授業、指導では、手に負えず、どうしようもなかった。だから体罰を行って、落ちこぼれは切り捨てたな。

そうして少年達は親にも学校にも見捨てられ、非行に走った。その是非について、私は語るつもりは無い。だが、」

勇者は歯を食い縛り、涙をはらはらと流している。

「切り捨てられた落ちこぼれ少年達の痛みは、私が教えてやる！切

られた人間の痛みを思い知れ、体罰される人間の痛みを思い知れ。体罰教師達よ！それでもやるなら、私は止めない！」

アースは教師達に笑いながら狂いながら、鞭打っていく。教師達の悲鳴。彼らはやがて肉の塊となり、尻を突き出した形のまま崩れ落ちる。アースは笑って鞭を投げ捨てると、クラウンを目で探す。クラウンは生徒達の周りを生石灰の白い粉で、運動会の競技のように白く取り囲む。そして、ＯＫサインを出す。

「さて、生徒諸君。今から鬼ごっこをしよう。その前に少し、蟻の習性についてお話したい。まだ、科学的に解明されていないようだけれど、蟻はチョークで引かれた線を越えることが出来ないと、みんなは知っているだろうか。」

クラウンがふよふよふよと朝礼台へ飛んで来て、袋から火炎放射器を二体出す。

「君達の周りには、チョークと同じ成分の石灰で円が描かれている。逃げる事は出来ない。さあ、先生と鬼ごっこしよう。先生が殺されれば君らの勝ち。だけど・・・。」

クラウンと勇者は、火炎放射器を肩から提げ、火を点ける。三メートル程の火柱が放出される。

「焼き殺されたら、君らの、負け（ハート）。」

アースは唇に指を添えて可愛こぶると、作業のように、生徒達を殺す。

（・・・最早、モンスター。人間には戻れぬ。悪夢を終わらせる為

に、全員殺すのが、俺の役目。モンスターの死刑執行人たる、俺の役目。）

赤い火は、美しい。何もかも、燃やしてしまおう。勇者は校舎に火を点ける。それはキャンプファイアーのように、燃え上がる。阿鼻叫喚の中で、炎の光を見つめながら、死んで行く蟻を見つめながら思っている。

（何もかも燃えてしまえ。辛い出来事も、悲しい記憶も、思い出の場所も、燃えてしまえ。）

勇者は泣きながら、何もかも燃やし尽くす。
最近、変な涙が出るなあと勇者は思う。映画で感動して泣いたりはしない。いつも閉ざしている心の扉が、何かの拍子で開いて、押し込めていた忘れていた苦しみが、思い出された時、息が詰まり、涙が出る。
叫び声を上げる勇者。

（騒がしいから叫ぶ。静かな場所では、誰かに聞こえてしまうから、叫ばない。）

叫んだり、泣いたり、笑ったりしながら、全てを燃やしていく。青春のあるべき、学校というモチーフ、子供の集う、光のモチーフを、焼き尽くし、灰にし、闇に葬る。

第六章　死にたい

「犯人は後一匹！」

グッ、と二人でガッツポーズをするものの、ぐったり感は否めないアースとクラウンである。燃やし尽くし、公園のベンチで、すすだらけの体で横たえる。火照っているうちは良かったが、時は冬。

「寒い！」

雪が舞い落ちてくる。疲れた体に寒さが沁みる。

「めんどくせえ。もう休まねえで、済ませるぞ！」

アースは愚痴ると座り直し、ファイルを取り出し、酒を一気にあおった。拳を握り、指を鳴らす。と、ガーランドが今度は青色の作業服を着て歌いながらホースのついたポンプ車を運転しながら現われる。

「水のトラブルお電話してねガーランドお水宅配サービス～。」

アースが突っ込む。

「今日はお前まで可笑しくなってるな。」

「数が多過ぎる。町全体がモンスターだなんて。それに、事件が悲惨過ぎる。」

クラウンは、疲れて踊れずに、水のトラブルの歌をベンチに横たわったまま所在無さげに口ずさんでいる。

「ポンプ車を、池につないでおいてくれ。後はヘリの手配と、政府への連絡を。」
「ああ、もう準備は出来ている。」

彼らは歩き出し、驚いてその後にクラウンが続く。
少し進んだ、二十メートル程の整地された更地に、巨大な穴があった。

「何ぃ、これぇ。」

クラウンが言う。

「殺害現場となった、二階建ての戸建て住宅の跡地。そして、女王蟻の居室へと続く、巣穴さ。」

アースが剣を抜く。

「ガーランドは残って、待機しててくれ。」
「かしこまりましたよ。」

○

アースとクラウンが巣穴へと飛び込むと、そこは長く続く暗い洞穴となっている。ライターの明かりを頼りに進む二人。土はひんやりと冷たく、湿り気を帯びている。そして彼らは開けた場所に出た。元は暴力団員であった風の恐面の男達が、束で蟻となって襲い掛かってくる。アースはライターをクラウンに任せ、彼らを千切っては投げ、千切っては投げ、その土の洞窟を進んでいく。クラウンは思う。

（アース、強さが神がかってるな・・・。）

さらに進むと、天井の高い巨大な広場があって、一人の男がいて、仁王立ちしている。彼が最後に残った女子高生コンクリート詰め殺人事件の犯人のうちの、主犯格の男である。

その男の左右には、透明な羽の付いた裸の若い羽蟻のメスとオスが、左右別々に分かれて、眠る子犬のように折り重なり、すやすやと眠っている。

「うおーっ！」

男が雄叫びを上げると襲って来る。アースは一発腹に蹴りを入れる。

「うっせぇな、黙れ。」

クラウンは、いつもに比べてあまりにも無敵過ぎるアースに怯え、ライターで刑事のレポートを照らし、ページを読んでみる。そこには、蟻は春になると繁殖期となり、選ばれた雄と雌が羽を付け巣を飛び出し、繁殖するので、春までに全ての蟻を退治しなければならない、と書かれている。

（こいつらがそうかあ・・・。）

と一人クラウンが納得していると、ライターの火がレポートに燃え移る。

「アチチッ！」

その時、クラウンは見た。奥に、裸で、十字架に貼り付けにされて、

股を無理矢理開かされている女を。その女は胸から下が蟻となっており、後ろに白く膨れた腹が数メートル長く伸びている。それは脈動しながら、大量の汗を掻き、あえぎ声を上げて、卵を産み出し続けている。
勇者は鬼の形相で、眠る羽蟻の王子と王女を剣で突き刺して殺す。
山のように積み重なる彼らの死骸の上で雄叫びを上げて、女王に駆け寄り、ひゃっはーと言いながら、彼女の膨れた腹部を、剣で切り落とす。これで新しい卵が産まれる事は無い。
女王は喘いでいた青白い顔を上げてようやくその瞳で勇者を見る。
勇者は伸びている主犯格の男の首根っこを引き摺って彼女の元へ連れて来、頬を引っぱたいて目覚めさせる。
勇者は彼に問う。

「何故、殺した。」

彼の答えなんてどうでも良かった。彼は親に愛されず育てられた。何度も更生の機会はあった。中学時代柔道に打ち込み、それなりの成績を上げた。けれど高校の柔道部で先輩のイジメに合い、退学。非行に走るも、愛した恋人の願いによりタイル貼り職人として真面目に働こうとする。社長に期待された新人であった。だが間が差して手を出したギャンブルの魅力にはまり退社。
ギャンブルを通して出会った暴力団員に、組に誘われ、良い様に使われる。そのムシャクシャした気持ちから、シンナーに手を出す。あげく、強盗、レイプを繰り返すようになり、その時つるんでいたほかの三人と共に、女子高生コンクリート詰め殺人事件を起こす。

「見てろ、お前がしたことを。」

彼が目の前にしている蟻の女王は、ずっと彼を支え続けた恋人であった。彼女は、女子高生が監禁されていることを彼を通じて知りな

がら、通報せず、この男を愛し続けた。

アースはその女に対し、額に短いロウソクを立て、熱いと震える彼女を愉しみ、ライターの油を彼女の全身にぶちまけ、火を点け喜び、クラウンにテープレコーダーで、『なんてったってアイドル』を流させ殴る蹴るの暴行を加え、ガムテープでぐるぐる巻きにし、性器にオロナミンCの瓶を二本押し込み、殺してと懇願する彼女を放置した。

アースは武田鉄矢の『声援』の曲にテープを変える。

主犯格の男は、シンナーに狂った頭で、それを見ている。アースは剣を投げると、言った。

「ほれ、殺してやれよ。」

良く分からないけれど、笑えてきた。アースはぺたりと座り込み、男を見ている。主犯格の男は立ち上がり、剣を取る。

「うおーっ！」

また雄叫びを上げて、恋人を殺そうとする。が、勇者はそれに足を引っ掛ける。

「えいっ。」

パタリ、とあっけなく倒れる主犯格の男。剣が放たれて、勇者はそれを手に立ち上がる。

「だから、うおーとかうっせえっつの。よいしょーっ。」

勇者は主犯格の足と腕を切り落とし、床に転がす。

「だるまー、なんつってアッハッハッハッハッ。」

アースは笑いながら、そこを立ち去り、出口まで戻り、ガーランドに指示を出す。

と、ガーランドが用意していたポンプ車で、池の水を引き込み、巣穴の中へ入れていく。

「あー死にたい死にたい（笑）。」

アースは、その隣に用意されているヘリに乗り、椅子に座って笑っている。クラウンが、彼の両腕に抱かれている。

「行っけぇーっ！地球防衛軍ー！」

最早狂ったようになっている勇者を乗せて、ガーランドの運転でヘリが飛び立つ。朝陽が昇ろうとしている。地平線の彼方から、ガーランドの命令で動いた政府軍の戦闘機が無数に現われる。ヘリが太陽を背に空を飛ぶ。勇者がヘリのマイクのついたヘルメットをガーランドから奪い取り、頭につけ、指を綾瀬の町に突き出し、指示を出す。

「全機爆撃用意！投下！」

爆弾が次々と綾瀬の町に投下される。綾瀬の町が燃えていく。蟻によって、歯車が動き続けていたモンスターの町の命が、蟻の巣が死んでいく。跡形も無く消えていく。

アースは思い出している。小さい頃の蟻にした遊びを。

脚を引きちぎり、巣に割り箸を突き刺して遊んだ。並ぶ蟻の一人を遠くのバケツの中に移動させて、あたふたする様を見守って笑った。じょうろで水を巣へ流し込んだり、袋にアリを集めて焚き火に放り込んだりした。一匹ずつ潰すのが楽しかったし、アリの巣コロリを使って一網打尽にするのがワクワクした。毒入り団子を一つずつ運ぶ様は壮観だった。
遊びに飽きると、足の裏で巣を踏み壊して、もうその遊びの事はすぐに忘れてしまった。

「あー、死にたい。」

アースは両手を広げて、ヘリから一人飛び降りて、泣き叫んだ。

「青い空、太陽、愛する人がいて、世界はこんなに美しいのに、僕はどうして、こんなに真っ黒なんだろう。」

冷たい風が心地好くて、虚しさに満たされて、今度は笑えて来た。勇者は手を伸ばすと、ふわふわ飛んで追いついて来た、クラウンを握り締めて抱き締めた。

「大好きだよ、クラウン。」
「そうだね。でももうお別れだね。死ぬんでしょ？」

アースは笑った。

「死ぬわけねーだろ。俺が死んだら、誰がモンスターを悪夢から解放してやる、つーんだよ、なあ。」

ぷーっ、とクラウンがつまらなそうに吹き出して笑った。アースは、ドサッ、と、大地に落ちる。とても柔らかな砂地に、ごろりと寝転

がる形になるアース。起き上がり、砂を払い、砂煙けぶる辺りを見渡し、目を凝らす。

「さてさてさて、長い長い序章もようやく終わって、本題ってわけか。一番会いたくなかったあんたを殺すのが、俺の役目だもんな。」

恐ろしいモンスターの雄叫びの声がした。アースは酒瓶と煙草を捨て、剣の束に手を、かけた。

終章　女王蟻

砂煙が収まると、その中心に、一人の女子高生が座っている。

「おおおおお・・・・・・っ・・・・。」

彼女は既に狂っていた。立ち上がり、両手を空に掲げて、ボロボロのセーラー服を纏い、嘆きの声を上げている。

クラウンが驚きの声を上げる。

「な、なんで、あれだけ爆撃したのに、まだ生きているのがいるの？」

アースが笑う。

「こいつが、本体だからさ。」

「どうして、女王は殺したのに・・・。」

と、女子高生が泣き叫びながら、その姿を変えていく。両腕が巨大な大アゴになり、下半身が長い尾となって毒針のついた首をもたげる。周りの砂地が彼女に向かってくぼんですり鉢状になり、渦を巻き始める。

「ま、まさか、そんな。」

クラウンが目を丸くする。

そこに産まれたのは、町一つを呑み込む、巨大な蟻地獄の巣であった。

「そう、あいつが、今回のモンスター退治の真の敵。女子高生コンクリート詰め殺人事件の被害者にして、蟻と化した全てのモンスターを操り、捕食し続けた女王、蟻地獄アレサ・クロウラー！」

彼らは砂に呑まれぬように、破壊された板を一枚取ると、サーフィンの要領で砂の上を波乗りする。

「おおおおーっ！」

アレサ・クロウラーと呼ばれた蟻地獄のモンスターは、巨大な大アゴを広げて、スリ鉢の底で、勇者が落ちてくるのを待ちかまえている。

「私を倒そうとする者よ。名を名乗れ。私の作り上げた巣を破壊し、私を殺そうとする者よ。」

アースが名乗りを上げる。

「私はモンスター処刑人、勇者アース・ヘイワード。お前を呪いから解き放ちに来た！」

アースが剣を抜き、両手で高く掲げジャンプするも、蟻地獄の長い尾で弾き飛ばされる。すぐにクラウンが飛ばす板に飛び乗るアース。蟻地獄は砂団子を脚で器用に丸めると、アースへと飛ばしてくる。アースはそれを剣で切り払う。

（いつも、戦っている時には、モンスターの心の声が聞こえた。モンスターの虚ろな目が、彼らの悲しい人生を俺に教えてくれた。）

闇の中、少女の心は、蟻と人の死体の山の上に座って、虚空を見つ

めている。彼女は語り始める。

「私は監禁されて殺されて、ドラム缶にコンクリート詰めにされた。世界を呪って、死んだ私を、悪魔は蘇らせてくれた。」

ドラム缶のコンクリートの中で、彼女の死体が蠢き泡立つ。ごぽり・・・。

「小さな蟻が一匹、ドラム缶の中に紛れ込んでいた。私は私の喉仏から産まれた小さな蟻地獄だった。私は、その蟻を尾の毒で突き刺して殺し、バリバリと食べた。」

警察によってドラム缶が発見され、チェーンソーで解体される。検死室に、こっそり潜む、一匹の虫。

「私は、ずっと検死の間も隠れて、家族の元へ帰るのを待った。火葬場で、こんな小さな虫となった私を、母がわかるはずもなかった。私はお母さんの肩に飛び乗って、家に帰り、一緒に裁判を傍聴し続けた。」

大アゴの噛み付き攻撃を避けながら、体制をうかがうアース。だがどうすることも出来ない。

「そして私は大きな父の背中に乗り、事件のあらゆる資料を一緒に見続けた。そして私は知った。この世界は、蟻の巣なのだと。」

アレサと呼ばれた蟻地獄が、血塗れの瞳でアースを見て笑う。

「犯人達は、未成年だと言う理由で、数年の刑を受けるだけで済んだ。私を犯人達に誘われて強姦した十人を超える町の少年達は、罪

にさえ問われなかった。彼らから監禁の事実を知っていて尚通報することの無かった少年少女は１００名を超えていた。マスコミはドラマのように面白おかしいエンターテイメントに事件を仕立て上げ、インターネットには自分も女子高生を監禁したいなどと、欲望塗れの書き込みが溢れた。
犯人達は、この綾瀬の町のシステムの中で、非行化していった。貧困が親にしつけをする余裕を無くさせ、学校は駄目な子を切り捨てた。そうして子供達は非行に走った。
親達は低賃金できつい仕事を死ぬまでやらされ続け、一部の金持ちと仕事の出来る人間だけが、楽で豊かで幸せな人生を得ることが出来た。
どこにも、愛や、思いやりの無い世界。
まるで小さな頃に図鑑で見た、蟻の世界のようだ。みんな、人の心を持たない蟻で、たった一人の女王蟻の為に、命の限りに働き、蜜を集め、営まれ続ける蟻の巣。
それなら、私が女王になってみんなを蟻にしてやろうと思った。そうすれば、痛みや苦しみを感じる心も無くなる。犯罪も無くなる。誰にも不公平の無い、平和と平等の世界が訪れる。
落ちこぼれや空気を読めない奴がルールを乱すことも無い、歯車の上手く回る社会。なあ！それがみんなの望みだろ？なあ！」

女子高生が憎しみの黒い炎で燃え上がる。

「私は、主犯格の男と恋人に近づき、首に噛み付いて毒を込め、蟻に変えた。そして、後はお前達の知っている通り、この町の全てを蟻の巣そのものに変え、地下へ潜んだ。次の春には、新しい女王達がこの綾瀬の町から飛び立って世界中を、みんなをモンスターに変えるはずだったのに。そうしてみんなが蟻になったら、私が全ての蟻を食って、この薄汚れた最悪の世界を終わらせるはずだったのに！私の計画も、もう、台無しだ！」

蟻地獄が耳をつんざく謎の超音波を発する。と、小さな蟻が足下から無数に現われ、アースの体を登り始める。

「う、うわぁ！！」

アースはそれをはたき落とそうとしてバランスを崩し、砂の渦へ落ちる！

「アース危ない！」

クラウンが大声で叫ぶ。その声で危機一髪、蟻地獄の尾の毒針を剣で払い、大アゴの先を片手で掴むアース。アゴの間にある彼女の顔と目が合う。虚ろな目をした少女。
口が大きく開かれ、アースを呑み込まんとして、アゴが激しく揺り動かされる。アースはジャンプして、少女を抱き締める。

「辛かったな。生きているうちに、助けられなくて、ごめんな。お前の命に誓って、俺が世界を救うから。だから、安らかに眠ってくれ！」

アースは剣を彼女と蟻地獄の中心へ、深く突き刺した。

と、蟻地獄の固い殻が破れて、中からエメラルド色の体をした、うすばかげろうが姿を現す。それは女子高生に羽をつけたような姿をしている。蟻地獄とは、うすばかげろうという蝶に良く似た虫の幼虫なのだ。だがまだ彼女の体は成体になりきれていない。羽は所々千切れ、腹は破れている。それは青空へ向かって透明な体で少し飛ぶと、内臓が肛門から流れ落ち、少女は手を青空へ伸ばし、大地へ墜落する。

駆け寄り抱き締めるアース。心の声が聞こえる。

「私も卒業が決まって、社会に飛び立ちたかったよ。でも、モンスターになっても、飛べなかったね。中途半端で・・・。アース、私、生きたかった。生きたかったよ。大人に、なりたかった。」

勇者は言葉が見つからなくて、ただ涙が止まらなくて、彼女を強く抱いた。彼女はモンスターの声でおおぉ・・・と声にならない野獣の断末魔を静かに響かせて、息絶える。だが、声が聞こえた気がした。

「ありがとう、アース・・・。」
「あぁぁぁ・・・あーあーっ！」

勇者は狂ったように泣き叫ぶ。クラウンがそっとモンスターの亡骸に触れると、それは宝石のように赤い蝶となって、魂となって、飛び立っていく。
こうして、ガーランドのモンスター図鑑に新しい、モンスターが刻まれた。
アースはいつものように泣き叫び続けていたが、やがて涙を拭うと、次のモンスターを求めて、歩き出す。

（泣いている暇があったら、一つでも悲劇を終わらせよう。泣くのは、死ぬ時で良い。）

幕

２０１０／１／１０

参考文献・参考資料／連絡先

◆参考文献・参考資料

少年の街　藤井　誠二／著　教育史料出版会（１９９２／０６）
女子高生コンクリート詰め殺人事件　彼女のくやしさがわかりますか？　死刑をなくす女の会／編　社会評論社（１９９０／１２）
かげろうの家　女子高生監禁殺人事件　横川　和夫／著　共同通信社　（１９９０／１１）
十七歳、悪の履歴書　女子高生コンクリート詰め殺人事件　渥美　饒児／著　作品社（２００３／０８）
うちの子が、なぜ！　女子高生コンクリート詰め殺人事件　佐瀬　稔／著　草思社（１９９０／１０）
殺人現場を歩く　蜂巣　敦／著　ミリオン出版（２００３／０７）

◆連絡先

感想やご意見などは迷惑メールに紛れる可能性があるので、以下のメールフォーム（ＰＣ・携帯共通）からお送り頂ければ幸いです！
ｈｔｔｐ：／／ｆｏｒｍ１．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｆｏｒｍ／？ｉｄ＝４９９２２５
皆さんの感想がとてつもなく創作の励みになります。

お読み頂き本当にありがとうございました！

作者：田中亮
発行：田中亮事務所
発行日：２０１０／０１／１０
ｗｅｂｍａｓｔｅｒ@ｍｏｒｎｉｎｇｐａｒｋ．ｃｏｍ

http://www.morningpark.com/

Copyright (C) 2009 Tanaka Ryo Office.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4007j/

呪われし勇者の伝説シリーズ/ガーランドのモンスター図鑑「女王蟻」～勇者の

2010年10月10日14時30分発行